

平成20年度 継続評価書

- 研究機関 : 早稲田大学、岡山大学、(株)日立製作所、日本電気(株)、NEC システムテクノロジー(株)
- 研究開発課題 : 情報の来歴管理等の高度化・容易化に関する研究開発
- 研究開発期間 : 平成 19 ～ 21 年度
- 代表研究責任者 : 小松 尚久

■ 総合評価 : 適(適／条件付き適／不適の3段階評価)

■ 総合評価点 : 30点

(総論)

ほぼ計画通り事業は進んでおり、引き続き推進する事が適当である。
実証実験における検証される定量的達成目標、および、その妥当性にたいする検証を早期に行い、本研究開発を推進することが適切。

(コメント)

- 本提案でも指摘されているように、紙媒体は最も良く使われていると同時に情報が流出しやすいメディアである。紙媒体を重視するというなら実用化という事を十分意識しなければならない。一方、プリントアウトした情報のセキュリティに関しては、インクや紙などに注目した別の方法も数多く研究されている。本成果の優位性を明確に主張できるか、標準化で優位な立場に立てるかなどは十分検討しなければならない。
- 研究機関が多い事から数だけではなく質の高い場での成果発表を期待する。
- 研究開発の大目標、および、ブレークダウンした目標については、概ね良好な目標設定が成されていると考える。しかし、個別バラバラに開発されてきた要素技術を連結し、総合的な試験を行う場合には、システム全体としての定性的達成目標、および、定量的提供性能が示されるべきであると考え。このため、開発状況を勘案しながら、実証実験のシナリオと達成目標、さらに追加開発やチューニングなどの手順も考慮しつつ計画を策定し実施すべきである。

- 本研究開発施策は、社会に成果を提供し、それにより実質的な情報漏洩を防止する効果を上げる事が大目標として設定されている。その大目標に対して、何処まで肉薄し得たかを示す評価指標を提示すべきである。個別具体の開発目標ではなく、施策全体としての目標設定も適切に行われるべきである。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況

(SABCD の5段階評価) : 評価 A

評価点 : 7点

(総論)

サブテーマごとの進捗にばらつきは見られるが、ほぼ計画通りの成果が出ており、年度内の目標達成は実現可能だと思われる。

当初予定された成果が得られ、さらに、一部に先取的な取組が見られる。

(コメント)

- 発表件数自体は目標を上回っており、成果発表数が多い事は社会的フィードバックとして評価できる。ただし、内容としては査読付きのものは少なくインパクトがあるプレゼンスを出しているとはいえず、次年度に向けて更なる努力を期待したい。
- 墨塗りグループ署名を別組織が協同で開発した事は評価できる。これが本当に技術的な優位性を持っているか、また標準化へ向けた戦略が適当なのかは今後十分に検討する必要がある。
- 研究開発施策としてみたときに、依然としてバラバラ感が払拭できてないが、一部プロジェクトに先取的な取組からの成果創出が実現できているところは評価できる。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(SABCD の5段階評価) : 評価 B

評価点 : 5点

(総論)

研究資金使用において特に問題のある点は見受けられず、予算計画書に則った効率的かつ適正な執行が行われている。

計画等に基づき、効率的かつ適切に執行されていると認めうる。

(コメント)

- 年度当初に予定した全てのサブプロジェクトが実施され、かつ、予算不足あるいは、予算過多が原因となる実施障害は認められなかった。

(3) 研究開発実施計画

(SABCD の5段階評価) : 評価 B

評価点 : 6点

(総論)

複数の組織の研究成果を統合しようとする努力が認められる。組織の連携がうまく取れれば、計画は十分に実施可能であり効率的に進むと思われる。

昨年度継続評価で指摘された項目を組み入れ、適切な計画の見直しと実施が行われたと認めうる。

(コメント)

- 計画されている実証実験は、統合テストにすぎないようにも思われる。展示会としてデモンストレーションする効果は十分認められるが、もし可能ならより実際に即した環境での実証実験が行われる事が望まれる。
- 最終年度の成果が本当に実用化されるための具体的な戦略はあるのだろうか。概略的なロードマップだけではなく、本事業の成果が今後どのように展開できるのか、さらに何が必要かなどを具体的に示せば説得力が増す。
- 最終的な実証実験を実施するために必要な開発コンポーネントを特定し、そのコンポーネントの開発にプライオリティを置くような形での計画設計もありえたのではないかと。成果回収のための、実証実験を含めた全体のポートフォリオ・プライオリティ設定についても、良く考える必要があるのではないかと。

(4) 予算計画

(SABCD の5段階評価) : 評価 B

評価点 : 5点

(総論)

予算計画は特に問題は無く積算額も妥当である。
適切な予算計画が行われている。

(コメント)

- 積算額についても妥当と認めうる。

(5) 実施体制

(SABCD の5段階評価) : 評価 A

評価点 : 7点

(総論)

組織間の連携がうまく機能しており、計画通りに事業が推進していく事が期待できる。
適切な実施体制があると認められる。

(コメント)

- 多くの組織が関わっており組織間連携に若干不安はあったが、成果の統合に向けて努力しているのが見受けられる。
- 外部のフォーラムや協会を巻きこんでの調査は評価できる。
- 施策3年目の目標達成のためには適切な体制が組み立てられていると考える。しかし、本当の意味での成果活用・社会展開を考えた場合、本当の意味での事業化推進のために必要な作業についても、単に必要な項目を提示するだけでなく、その実施の可能性についても適切な予測と仮定を設定し、今年度すべきことを特定することが必要ではないか。
- 現在の成果利用計画の場合、事業化、標準化共に「できたらいいな」という目標設定になっており、その実施を確実にするための条件等の情報提示をするだけでも、よりよい事業継続提案となったのではないか。